

## 日本で選定された「八景」の景物について

石立裕子\*, 綿抜豊昭\*\*

## The Study of Hakkei selected in Japan

Hiroko ISHIDATE, Toyoaki WATANUKI

## 抄録

北宋代に文人画家・宋迪によって創始された山水画題「瀟湘八景」をもとに、鎌倉末期から現在までの約700年間にわたって、日本では多くの「八景」が選定されてきた。それが研究にあたいすることは、地域の「八景」の所在を明らかにする研究や、1つの「八景」の見方についての研究、造園における「八景」についての研究など、様々な視点で研究がなされてきたことからうかがえる。

本研究は、これまで取り上げられることのなかった「八景」の景物について調査、考察したものである。その結果、日本人が取り上げた「景物」は、「瀟湘八景」の影響を受けつつも、桜や蛭、紅葉など、古来詩歌に詠まれてきた景物が選定されていることが明らかになった。

## Abstract

In Japan, there are many Hakkei(eight views) selected from the end of Kamakura era up to present time, modeled on Xiao-Xiang Hakkei which was made by Song Di who was a officialdom of Song dynasty. The reason why this phenomenon is remarkable is that there are many research reports from various points of view. For instance, there are researches on locations of Hakkeis, on a way of enjoying landscape of each Hakkei or on Hakkei in the landscape gardening.

This is a report on Hakkei in Japan aiming at Keibutu(words identified landscapes). Although Keibutu which have been selected in Japan had been influenced by Xiao-Xiang Hakkei., they represent the traditional Japanese taste.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士前期課程  
Master's Program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies,  
University of Tsukuba

\*\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科  
Graduate School of Library, Information and Media Studies,  
University of Tsukuba

## はじめに

遅くとも鎌倉時代末期の乾元元年（1302年）以後<sup>1</sup>から現代まで、日本国の領土とされる地域（以下「日本」と称する）において、「八景」という地域の景勝の捉え方がなされてきた。限られた地域の中から、8つの風光明媚な場所を選定し、「八景」としてまとめる方法である。

「八景」とは、もとは北宋代に文人画家・宋迪が長沙に赴任中に、洞庭湖を望む八景台に「瀟湘八景図」を描いたことが始まりとされる、8つで1組の山水画題のことである。<sup>2</sup>

「瀟湘八景」の8つの題はそれぞれ、《瀟湘夜雨》《洞庭秋月》《煙寺晚鐘》《遠浦歸帆》《山市晴嵐》《漁村夕照》《江天暮雪》《平沙落雁》である。

鎌倉時代末期に五山僧を通して日本に渡来し、以後上流階級を中心に伝播し、山水画として描かれ、また詩歌の題として題詠されてきた。後代には日本の風景に「瀟湘八景」をあてはめた「近江八景」や「金沢八景」などが選定されるようになった。江戸時代には「十境」の延長として、大名や旗本の別荘の庭に「八景」が選定され、また往来物や浮世絵に描かれるなどして、「八景」がより人口に膾炙した。現在でも「八景」選定行為は途絶えておらず、知的遊戯を目的とした選定ではなく、地域の環境保全や観光資源の発掘などを目的とした選定が行われている。

日本の「八景」に関しては、環境工学、文学、観光学などさまざまな視点から研究が行われてきた。<sup>3</sup>その中でも、「八景」に関する基礎的データを示したという点で、「八景の分布と最近の研究動向」は注目すべきものである。<sup>4</sup>そうした中で、看過されてきたことの一つは、「八景」の景物についてである。

景物とは、『広辞苑（6版）』によると、「花鳥風月など、四季折々の風物」とある。本稿もその意味で使用する。

「八景」を成り立たせるものとして場所と景物は重要な要素であるが、場所に比して景物は注目されることがなかった。そこで本稿は、「八景」の景物がどのようなものであったかについて調査した結果とそれに対する考察を述べるものである。

## 1. 日本の「八景」の数

### 1.1 時代別八景数

まず、調査対象の「八景」の数とその成立時期について述べておく。先に述べたように、1996年と2000年に、

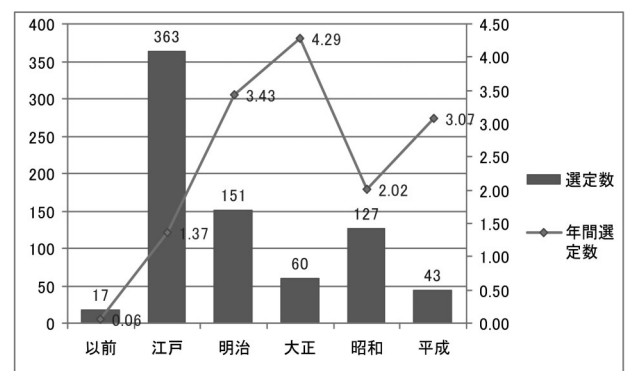
国立環境研究所は、各地方自治体にアンケート方式での「八景」分布調査が行われた。<sup>5</sup>その結果、全国に893の「八景」が存在することが明らかにされた。<sup>6</sup>このうち撰定時期が明らかな761を時代別に見てみると、以下のようになる。<sup>7</sup>

江戸時代以前（1302～1603年） <sup>8</sup>	17
江戸時代（1603～1868年）	363
明治時代（1868～1912年）	151
大正時代（1912～1926年）	60
昭和時代（1926～1989年）	127
平成時代（1989～2003年）	43

年間撰定数は、以下のようになる。（小数点第二位以下四捨五入）<sup>9</sup>

江戸時代以前（1302～1603年）	0.06
江戸時代（1603～1868年）	1.37
明治時代（1868～1912年）	3.43
大正時代（1912～1926年）	4.29
昭和時代（1926～1989年）	2.02
平成時代（1989～2003年）	3.07

上記の数値をグラフにしたものが、以下のグラフ 1-1 である。



グラフ 1-1 年代別選定数と年間選定数

### 1.2 選定年代と選定数についての考察

グラフ 1-1 で明らかなように、江戸時代になってから「八景」が盛んに選定されるようになったことがわかる。

明治時代以後になると、鉄道などの交通機関が発達し、それまでの木版刷りよりも大量に印刷が可能な印刷技術が伝来し、さらには郵便による通信手段が発達した。そうした時代の文化的変化は、観光旅行の増加、絵

葉書の流行といった文化現象となり、昭和2年には、毎日新聞社主催、鉄道省後援で「日本新八景」が選定されるなどし、それが「八景」の選定の増加と結びついたりと考えられる。明治、大正、昭和時代は、あわせて121年間であるが、265年続いた江戸時代の年間選定総数よりも多くなっている。

こうして多くの「八景」が選定された結果、「八景」は全国的に存在することになった。

### 1.3 地域別選定数

先の国立環境研究所の調査結果によれば、

全国	1
東北地方（北海道を含む）	162
関東地方	292
中部地方	169
近畿地方	115
中国・四国地方	84
九州地方（沖縄県を含む）	70

となる。先にも述べたように、この調査結果はアンケートに基づくものであり、実数はこれよりも多く、インターネットによる調査でもこれらのほかに176の「八景」があることを確認している。<sup>10</sup> その結果、国立環境研究所の調査では「八景」のない唯一の県である徳島県にも「八景」があることが確認され、「八景」の選定されたことのない都道府県はないことになる。

## 2. 「八景」の分類

「瀟湘八景」の画題とその画意は以下の通りである。<sup>11</sup>

山市晴嵐：よく晴れた日の山中の冷え冷えとした空気の中で、市が開かれている風景。画意として酒屋の幟がよく描かれた。

漁村夕照：うら寂しい漁村の汀の湖面に返照する夕日の風景。干された網や漁をする人で画意を表わす。

煙寺晩鐘：遠くに煙るように見える寺から聞こえてくる入相の鐘の音の風景。山の中腹に樹木に囲まれた寺の屋舎を描き、画意を表わす。

瀟湘夜雨：湖面に降り注ぐ夜の雨の風景。汀に止められた舟や、汀に生えている樹木の乱れ、斜めに引かれた線等で画意を表わす。

遠浦帰帆：夕方遠方より帰ってくる帆船の風景。岸から

離れたところに浮かぶ帆影で画意を表わす。  
洞庭秋月：湖面に映る秋の月。舟や湖面に浮かぶ満月で画意を表わす。

平沙落雁：平な砂原に舞い降りてくる雁の群れの風景。  
飛来する雁の群れで画意を表わす。

江天暮雪：湖の上空から降り注ぐ夕暮れ時の雪の風景。  
多くは、雪山で画意を示す。

上記のように、「瀟湘八景」の題は、「場所十景物」から成り、特定の地名を示さない。

日本では、14世紀後半、禅僧・義堂周信によって選定されたとされる鹿兒島の「大慈八景」が、瀟湘八景の様式を呈しているものである。それは以下の通りである。

龍山春望・野市炊煙・漁舟帰帆・江上夕陽  
橋辺暮雨・東宮秋月・古寺緑陰・西塞夜雪

「瀟湘八景」にならない、場所が地名ではない。

次に、日本で最も流布したと考えられる「近江八景」は以下の通りである。

栗津晴嵐・瀬田夕照・三井晩鐘・唐崎夜雨  
矢橋帰帆・石山秋月・堅田落雁・比良暮雪

場所がすべて近江地方の地名であり、「瀟湘八景」の景物を組み合わせたものである。近江八景成立以後の日本における「八景」のほとんどはこの形式、すなわち、地名と景物の組合せを模している。

景物に注目して、日本の「八景」を分類すると以下のようなになる。

踏襲型： 8つとも「瀟湘八景」の景物を用いた「八景」

一部変化型： 8つの内いくつか「瀟湘八景」の景物を用いた「八景」

完全変化型： 1つも「瀟湘八景」の「景物」を含まない景物を用いた「八景」

名所型： 景物を含まない「八景」

以下、本稿で踏襲型八景といった場合、上記の踏襲型の「八景」を意味する。

先に述べたように、日本の「八景」の総数は893である。それを上記の分類にわけると踏襲型268、一部変化型308、完全変化型71、名所型190、不明56となる。

### 3. 景物について その1

#### 3.1 「瀟湘八景」の景物を用いた「八景」

「景物」に「瀟湘八景の景物」を含むのは、踏襲型、一部変化型の「八景」である。踏襲型は完全に「瀟湘八景」を踏襲し、一部変化型は融合型といえる。踏襲型の景物数と一部変化型の中に見られる「瀟湘八景」の景物数を合わせると、総数は3,479である。多い順に記すと以下の通りである。なお便宜上「青嵐」は「晴嵐」として、「慕雪」は「暮雪」として扱い、以下の総数に含む。<sup>12</sup>

秋月 497 晩鐘 469 夕照 435 夜雨 430  
晴嵐 428 暮雪 425 落雁 413 帰帆 382

これをさらに先に示した時代別に表したものが表2-1である。

表2-1 年代別「瀟湘八景」を踏襲する景物数

	秋 月	晩 鐘	夕 照	夜 雨	晴 嵐	暮 雪	落 雁	帰 帆
以前	12	10	9	8	8	9	7	7
江戸	230	220	204	204	203	199	192	178
明治	98	91	91	85	88	88	84	79
大正	38	31	31	31	29	29	30	30
昭和	32	33	27	28	26	27	25	22
平成	2	1	2	1	2	1	1	1
不明	85	83	71	73	72	72	74	65

#### 3.2 考察

「秋月」と「帰帆」の差を除き、極端な差はみられないが、その差が生じた理由について考えてみたい。

例えば、勅撰和歌集の季節の部では、春の部と秋の部の歌数はほぼ同数、夏の部と冬の部の歌数はその半分程度であるように、日本では、四季のうち、春秋が好まれ、文学でもその傾向はみられる。連歌で〈四花七月〉と重視されているように、春の景物の第一は「花」であり、秋の景物の第一は「月」である。

「瀟湘八景」の景物に春の「花」がない以上、秋の「月」が多くなるのは、日本の風雅の世界では必然ともいえることである。

限られた地域で、「八景」が選ばれる場合、月は日本のどこからでも見ることができ、どの地域でも日は昇り、夕方になり、雨は降る。晴嵐は本来、晴れた日の山

気を意味するので山を必要とするはずであるが、嵐という字に当てられるように「風」のイメージを持つとすれば、風はどこにでも吹く。ところが、雪は降らない地域もあり、雁が飛来しない地域もある。まして帆をあげる船が見られる地域は限られる。その地域には存在しない景物が、取り上げられず、それに代わるものが取り上げられた結果、一部変化型八景が生じたと考えられる。すなわち、その景物がその地域にあるかないかの差がこうした結果になったものと考えられる。

### 4. 景物について その2

先に述べたように、完全変化型八景の景物は、全て「瀟湘八景」の景物ではない。また、一部変化型八景には「瀟湘八景の景物」ではないものが含まれる。これらの景物の総数は1,837である。景物の種類は957である。<sup>13</sup>

このうち、以下の景物が多い。

1. 「植物」
2. 「虫・魚・動物」
3. 「鐘」

以下、これらについて述べる。

#### 4.1 「植物」

##### 4.1.1 「植物」の種類と数

「植物」を含む景物は総数334で、個々については以下の通りである。なお、「植物」では、「杉松」「梅柳」のように、1つの景物に2つの植物が含まれている場合はそれぞれの項目に1つずつ計上しているため、下記の数を合計すると336となる。

松77, 桜62, 紅葉60, 躑躅13, 藤12, 稲9, 杉9, 梅8, 桃8, 蓮5, 銀杏4, 竹4, 杜若4, 蘇鉄3, 柳3, 芦2, 茸2, 堇2, 萩2, 麦2, 櫻2, 杏1, ウツギ1, サツキ1, 鈴蘭1, 菜の花1, 針桐1, 柊1, 都花1, 山茶1, 蕨1, 樹10, 花6, 草2, 秋草1, 落ち葉1, 核果1, 枯木1, 枯草1, 草花1, 葉1, 野菜1, 若菜1, 若葉1

これらの時代別上位3つを以下に示す。

表 4-1 「植物」の景物上位 3 つの時代別選定数

	松	桜	紅葉
江戸以前	2	0	0
江戸時代	35	30	26
明治	19	11	19
大正	3	6	3
昭和	9	4	4
平成	0	0	0
不明	9	11	8

表 4-2 「虫・魚・動物」上位 3 つの時代別景物数

	蛩	雁	時鳥
江戸以前	2	2	0
江戸時代	32	20	11
明治	20	1	6
大正	5	2	1
昭和	3	1	1
平成	0	0	0
不明	10	2	4

#### 4.1.2 考察

「植物」は、「瀟湘八景」にみられない景物であり、題に関しては、その影響はない。

上位 1, 2 位である松と桜は明治大正期の地理学者・志賀重昂著『日本風景論』<sup>14</sup>にも、日本を代表する植物であると評価されており、松及び桜がより多く選定されているということは日本の風景を反映しているといえる。

また、松は、常緑樹として、縁起のよい植物であり、〈白砂青松〉という言葉が示すように、風光明媚な景色の代表的な景物である。また、絵画にもよく描かれる。そのため、画題としての「八景」に多く取り上げられたと考えられる。

また、桜は、単に「花」とあるものも「桜」と考えられるので、総数は 68 となり、松の撰定数とあまり変わらないといえる。先に述べた秋の「月」に対する春の「景物」を代表するものである。そのため多くなったと考えられる。

また、「桜狩」「紅葉狩」という言葉が示すように、春の桜に対して秋の植物をあげるとすれば、それは紅葉である。そのため、多く選ばれたと考えられる。

### 4.2 「虫・魚・動物」

#### 4.2.1 「虫・魚・動物」の種類と数

「虫・魚・動物」を含む景物は総数 240 で、個々については以下の通りである。

蛩 72, 雁 28, 時鳥 23, 鹿 12, 鷗 8, 蛙 7, 千鳥 7, 鴉 6, 鶯 6, 鶴 6, 馬 5, 鮎 5, 水鳥 5, 鷹 4, 猿 3, 雲雀 3, 鶯 3, 鶉 2, 鳳 2, 雉 2, 鶯 1, 鶯 1, 兎 1, 鴨 1, 狐 1, 四不像 1, 鈴虫 1, 雀 1, 蟬 1, 狸 1, 二枚貝 1, 鳩 1, 梟 1, 鳥 7, 虫 6, 魚 5

時代別撰定数は以下のとおりである。

#### 4.2.2 考察

「夏虫」とは具体的には「蛩」を意味するように、春の「花」、秋の「月」と同様、夏の代表的な景物は「蛩」である。このことが、選定数の多さとなったものと考えられる。同様に、ホトトギスが、夏の代表的なものであるので、このように多かったのではないと思われる。

一方、同じ鳥である「雁」が多いのは、「瀟湘八景」に《落雁》があるからであろう。ただし、《落雁》以外の雁の景物は 20 もあり、そのうちの一つである「帰雁」は 7 ある。これは冬の内に、日本に来ていた雁が春になり大陸に帰ることを意味し、日本独自のいいまわしといえる。

### 4.3 「鐘」

#### 4.3.1 「鐘」を用いた景物の種類と数

「鐘」を含む景物は総数 63 で、それをさらに形容した言葉に注目して分類すると、以下の通りである。

時 : 暁鐘 13, 明鐘 2, 晨鐘 3, 暮鐘 9, 夕鐘 1, 昏鐘 1  
 気象 : 霜鐘 3, 霞鐘 1, 風鐘 1,  
 場所 : 寺鐘 4, 山鐘 2, 郷鐘 1, 遠鐘 1, 院鐘 1  
 動詞 : 詣鐘 1  
 形容詞 : 幽鐘 2, 寒鐘 1  
 音 : 鐘声 2, 鳴鐘 2, 鯨音 2, 洪鐘 1  
 名称 : 梵鐘 3, 鐘楼 2, 鐘 1, 時鐘 1, 舎鐘 1, 番鐘 1

先に示した時代別に、その変遷をみてみると以下のようになる。



	総数	時	気象	場所	動形	音	名勝
以前	3	2	0	1	0	0	0
江戸	32	14	3	4	3	5	3
明治	10	4	1	3	1	0	1
大正	7	5	0	0	0	0	2
昭和	4	3	0	0	0	0	1
平成	2	0	0	1	0	1	0
不明	5	1	1	0	0	1	2

#### 4.3.2 考察

年間撰定数が最も多いのは先に述べたように大正時代だが、景物が多種にわたっているのは江戸時代及び明治時代に撰定された景物であることがわかる。

日本では、朝と夕に時鐘が撞かれる中、最も多かったのは暁鐘13であり、同様に朝方の鐘を意味する明鐘・晨鐘も撰定されている。「瀟湘八景」では、晩の鐘が選ばれているなか、日本の「八景」では朝方の鐘が多いことに中国との差異を見出せる。

《霜鐘》や《寒鐘》など、季節では冬を意味する景物も選ばれている。こうした鐘の細分化がなされた点も特徴といえる。

#### おわりに

以上、本研究では、「景物」に注目し、「瀟湘八景」をもとにしながらも、独自の「景物」をとりいれた「八景」が選定されたことを明らかにした。

#### 注及び参考資料

- 1 乾元元年に宮城県仙台市で「松島古八景」が選定されている。
- 2 島田修二郎. “宋迪と瀟湘八景”. 中国絵画史研究. 中央公論美術出版, 1993, p. 593.
- 3 環境工学の研究としては, 上野訓・鈴木信宏. 江戸八景にみる移ろいとその構造. 1997, 弓場泰子・後藤春彦. 安濃津八景に見る津市の景観構造について. 1992. 文学の研究としては嘉手苺千鶴子. 『南苑八景』: 解説と翻刻. 1998. 米谷巖. 元文4年『伊都岐嵐八景 下』 解説と翻刻. 1986. 観光学としては, 青柳周一. 十七・十八世紀における近江八景の展開 近世の名所の成立をめぐって. 地域のひろがりと宗教. 吉川弘文館2008, p.244-265. などがある。

- 4 今回使用した日本の「八景」に関するデータは、2007年に国立環境研究所によって刊行された国立環境研究所研究報告第197号「八景の分布と最近の研究動向-過去の景観評価のデータ-」に付随する、日本の「八景」分布リストである。
- 5 榊原映子. 全国の八景リスト. 国立環境研究所報告, 2007, vol197, p.106-145.
- 6 榊原氏は全部で1166の「八景」を確認したと述べているが、本稿では、「8」という数字に限った。リストの中には、「三景」や「十境」なども含まれていたため、これらは除外した。よって、総数は893となった。
- 7 時代区分は、前傾5.に掲載されている青木陽二・榊原映子氏による「八景の伝播と分布」を参考とした。また、今回利用した前傾5.のリストでの「八景」選定年代の記載では、「江戸以前」や「大正時代」また「享保年間」など、大まかな選定年代しかわからない「八景」が多く、選定年が1年に定まる「八景」は893中395しかない。よって、今回は便宜上、前傾5.のリストに従い、「江戸以前」「江戸時代」の外、年号を用いた。
- 8 今回、全ての年代の終始する年を重ねることとした。そうすることにより1989年などは実質2年間程の長さとなってしまい、年感選定数に若干の誤差が生じてしまうこととなってしまふ。それならば、重ならないように例えば昭和年間は1926～1988年というようにした方がよいようにも思うが、今回、明治45年(1912年)に選定された「八景」が存在し、この「八景」を明治年間に選定されたものとするために、年代をすべて重ねることとした。
- 9 江戸以前の算出は、リスト内で最も選定年代の早い宮城県の「松島古八景」の乾元元年(1302年)から慶長8年(1603)の301年でその期間に選定されたとされる八景数17を割った。小数第3位を四捨五入し、第2位までの表示に揃えた。江戸以前は0.05647…という結果になったので、少数第3位の6を四捨五入し、0.06を江戸以前の年間選定数とした。以下の時代の算出も同様の手法である。江戸:  $363/265=1.369 \rightarrow 1.37$ , 明治:  $151/44=3.431 \rightarrow 3.43$ , 大正:  $60/14=4.285 \rightarrow 4.29$ , 昭和:  $127/63=2.015 \rightarrow 2.02$ , 平成:  $43/14=3.071 \rightarrow 3.07$ 。
- 10 全国の都道府県立図書館の提供するOPACを用いて、「八景」を検索語として検索した。該当した文献自体にはあたっていないため、「八景」の内容がわかるものは91しかない。よって、今回の総数8

93には含んでいない。しかし,このような簡易的な調査でも100以上の未確認の「八景」を確認でき,日本にはより多くの「八景」が存在すると考えられる。

- 11 題意の説明は,渡辺明義. 瀟湘八景. 至文堂, 1976, p.102, (日本の美術, 24). による。
- 12 青嵐は33, 慕雪は83あった。さらに, 該当の「八景」のうちで, 嵐・慕雪以外は全て「瀟湘八景」の「景物」であるのが青嵐では13, 慕雪では45と約半数あり, 誤って使用した可能性を考慮し青嵐は晴嵐, 慕雪は暮雪であると数えることとした。しかし, 嵐は季語にあり, 「若葉の頃に吹き渡るやや強

い風」という本来の意味で用いられている可能性がある。また, 慕雪は季語等には存在しないが, 「雪を慕う」等の意味として撰者が用いている可能性もある。

- 13 1つの景物に対して, 植物が複数選ばれているものもある。例えば, 「杉松」という景物では杉も松も1つずつ数えてそれぞれ計上した。
- 14 志賀重昂. 日本風景論上. 講談社, 1976, p.197, (講談社学術文庫, 59).

(平成21年10月22日受付)

(平成22年1月13日採録)